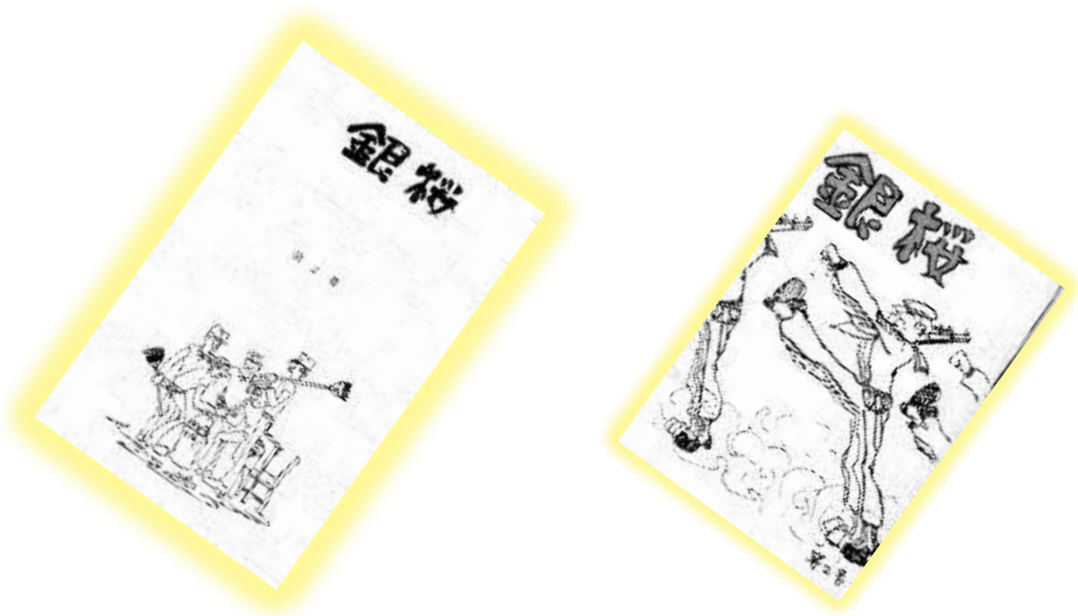


海上自衛隊生徒文集 「銀桜」第2号

第10期、第11期、第12期生徒自啓会
昭和41年発刊



「文集って？」

全く記憶のない文集を「55+1同期会」で、目黒誠氏が披露した。そこで、12期生徒のみの投稿を抜粋し転記しました。

今はパソコン等、便利な印刷機能があり、簡単に作成できると思うが、当時は編集においては並大抵ではなかったかと推察される。投稿者は限られた人々かもしれないが、当時を思い起こしながら読んでみて下さい。

尚、10期、11期生徒の投稿文は割愛させて頂きました。

また、当文集編集長は「木原」となっていますが、第10期生の木原敏一氏と推察されます。

目次

休暇はもう終わる	藤原 陽	3	あの人は	太田 逸男	10
今後の生徒のあり方について	内藤 登	4	消灯後	岡村 良三	10
生徒のあり方について	岡村・中條	5	孤独	渡辺 真二	11
生徒(隊)の理想	2班(匿名)	5	雨	樋口 満生	11
無題	津金 鋭一	6	自然	石原 恒夫	11
あの夏の日	平野 清文	6	勇氣	森尾 邦雄	12
無題	小島 春雄	7	夢	新名 吉富	12
秋吉台地にて	五十嵐 誠	7	試験	重松 均	13
太陽	三島 有二	7	初夏	渡部 修司	13
無題	岡本 隆志	7	人生詩	脇本 由一	14
山に登って	塩原 恵	8	総員起こし	柳瀬 泰雄	14
ふるさと	立川 正秀	8	カッター	庄野 健郎	15
一日の終わりに	山崎 雪雄	8	運命	福本 耕作	15
星	森永 忠夫	9	春が来ると	竹内 章幸	16
第五の春	徳島 一安	9	無題	山下 知美	16
到来	小林 賢一	10	五時限目	草野 進一	16
			生	武田 繁典	17

随筆

入隊一年	後藤 孝行	18
幸福とは	片桐 悦夫	19
頭の上の出来事	森本 裕輔	20
空想物語	目黒 誠	21
青春と文学	内藤 登	22
休暇の思い	山本 仁	22
夢	竹山 認	23
帰省して	秋吉 義雄	23
休暇	和田 昌三	24
帰省	岡本 正治	25
しあわせ	今村 孔久	26
母の日	立和田 伸	26
上州風土記	篠原 壽隆	27
ぼくが思うこと	梅澤 徹	28
時々考える事	永野 善広	29
総員起こしの事	村中 良	29

川柳・俳句・短歌

絶望	中丸 治行	30	中條 慶晴	32
・	金田 佳幸	30	森下 温樹	32
・	横山 孝行	30	立川 正秀	31
・	清野 勉	30	川尻 和正	31
・	法土 猶典	30	濱野 義信	31
・	伊藤 修	30	高橋 長生	31
・	小西 一三	30	北山 至	31
黒い水面	矢野 大介	32		
さすらいの一匹ミミズ	松田 真治	34		
編集後記		35		
十一期	岡田 栄			
十二期	目黒 誠			
編集長			上林山貞俊	
十期	木原			

いた。自然と足がそのほうに向き、やや照れながら声をかけていた。

「どうまで行くんですか。」

「ロウタンまでです。」

「エ？」

「三次から四つさきのえきまでです。」

「ああそうですか。どんな用ですか……。」

「ええ、親類へいへんです。」



ヤボな聞き方だったが、気さくに返事してくれたので、スニースイ話がすすみ、一時間ぐらいいも話した。なんせ、乗客が少ないものだから車軸に数名程度だった。くだねに気がなするともなく、好きだけ話できた。術校のようすだの、生活の「と」だの、適当に輪をかけて話したが、とても喜んで聞いてくれた。

その間も列車は休みなく、走り続けていたらしく、いつか三次のホームにすべりこんでいた。「」で四十三分間の待合だという。腹も入ってきたとだし、話が一段落したと「」を見計らって食事にした。

「列車は三好を十二時五十三分に発車しました。」

その言いし車内放送「」はハッと気がついた。どうも食事がすんべかり眠っていたら「」思ひ車内はかなりののりだ。俺の横にも新しく客がすわって「」。

「ああ、あそこ三次で乗ってきた人達だな。」

と聞いて同時に「」

「彼女とはもう話ができないな。」

と思つた。事業その「」おのり「」彼女とは「」へび「」目の駅から姿を消して「」。

なぜか眠い。再び睡魔がおそってきた。その意識の希薄な中でぼくは考え続けた。

もしあつたらずかで休暇もおわりだな……。



今後の生徒のあり方について



3 班内藤 登

今後生徒隊を「」にもりあげ「」かは、生徒自身に「」える。生活面においては先輩と後輩との密接なつながりが必要だと思う。それにはクラブ活動を通じての接触、そして悩み解決を相互に見をだし「」は、けまし合「」行「」といった具合である。規律が徹底した団体も全国には数少ないが、特に自衛隊生徒は国土を守る防人である「」を再認識して、「」も「」先輩、後輩間スムーズに「」である「」目「」に我々は努力せねばならぬといえる。高校生は大学受験という目的があるがためにそれに向かつて、毎夜遅くまで勉強「」努めて「」が、それは「」ので「」生徒も立派な自衛官となる「」に「」の「」です。この立派な自衛官「」しても「」う「」ものであるか「」非常「」む「」か「」思「」。生徒の目的「」う「」も「」は「」海曹「」必要「」知識「」技能「」習得「」する「」のが「」であ「」か、決して自衛隊だけの知識だけに「」限「」ず、他の方面「」も「」興味「」が「」た「」手「」を「」して「」も「」の「」。

悩み「」を「」言「」う「」た「」方「」が「」で「」た「」ら「」す「」が「」、二「」度「」の「」列「」

二、三年の時代は自分から行動し、自覚的な心を養い、四年生になつて、下級生の事を再度確認して、後輩の指導にあたり、三等海曹入の道を開くべきかと思つた。しかし四年生の間で生徒を左右させるのは教官にあると思つた。だから教官の意見を尊重し、四年生が統一するべきだと思つて、生徒隊を形成するべきだと思つた。

最後に、理想のことがだが、これは良くなるよりもよくなることと越したことはないが、それを急激に行つて、ボロが出てくるに違いない。だから、年月をかけてじっくりの問題に取り組むことが大切ではないだろうか？

詩

「無題」



春だ
春風が私の頬をそつと撫せつてく
さあ希望の春だ
寒がりやの君も
ひっこみじあんの君も
内気な君も
病弱な君も



水測 津金 鋭一

春がきたんだ
若者らしく
若くはじつじつと
シモンの味の
恋をしようよー

「あの夏の口」



遠くの青い海
僕を焼きつてくつたまつた
キラキラ光る
太陽に照らされて
静かに、キラキラ真珠のように
輝いてる
僕の耳には波の音だけが入ってくる
白い砂浜、うちあげると、その音は
単調で、全々前と変わらな
い
何度も何度もへり返す
青い海と白い砂浜、そして波の音
僕は思い出す あの夏の口



2班 平野 清文



「無題」

夜がまたやってきた
 足音もたてずに、声もなく
 ベッドに横たわると、疲れがドツとおそいかかる
 今日一日 よくやったなあー
 単調なようだが、充実していた
 妹はもう寝ただろうか？
 ふと故郷を思い出す



2班 小島 春雄



秋吉台地にて

白い草と青い草
 どこまでも続く二人の世界
 遠くに見える小高い丘は
 ぼくたち二人の静かな家
 さあ、かけようこの静かな土地を
 二人の足音だけが響くこの世界を
 カレンフェルド カレンフェルド
 ぼくらの世界



水測 五十嵐 誠



太陽

太陽は生命の光だ
 木々を照らし、花を照らす
 山々を照らし、川を照らす
 大地を照らし、大海を照らす
 草に花に木に生命を与えた
 この光が私に
 希望と夢を与えた



2班 三島 有一



「無題」

いつまでもいつまでも続く山
 一つ越えればまた一つ
 あの山 二つの山
 険しい大きな山
 ふぶきがおこり雪がふり
 私の前に立ちふさぐ
 乗り越えよう
 若い力と勇気で
 山に負けないで
 私の道を 二の手で
 社会人として人間性をますために



2班 岡本 隆志



「EJ」の入り

古鷹山に登った

気をはりすには良い所だと聞いた

一人で登った

ラジオを聞きながら登った

一歩一歩確実に踏み締めて登った

なぜこんな事にならなくちゃいけないのか

あー明日からじゃあ

変なわだかまりなんて

江田島やまわりの海へふりまわった



水測 塩原 恵



「EJ」の入り

あの青い空のせいじゃないか「EJ」があの

青い空。あーあ

力強き父、あーあ

まぶたの裏に心の奥に

いつかいつかあーあ

暗いホームでいつかいつか「EJ」

何も言わずに母を見てくれた父

汽車が動く手を振る母 黙って

青い空。あーあ

力強き父、あーあ

母の「EJ」



水測 立川 正秀

一日の終わりに

今日も短い一日が終わった

僕は寝床へもぐりこむ

毛布の重みと暖かさを

何とも言えない心のやすらぎを覚える

かと思いつくと

今日あったいろいろな出来事が頭に浮かび

そして頭の中をまじまじと見つめて

友だちの顔、教官の声

今日はいやな事はかりだった

しかし僕の毛布は、その心を吸収し

不思議な魔力で、それらを吸収し

夢と希望にみちた明日を残してくれる

「明日も頑張るぞー」

やがて明日を夢見ながら

静かに目を閉じるとき

眠りの精は僕を夢の世界へ

運んでいくのだ



山崎 雪雄



星

月のない晴れた夜

星空を見上げる

この神秘的な永遠の世界

何億年も昔から輝いていた

何万年も昔から人々はその神秘さを考えた

色々な伝説が生まれた

色々な言伝えができた

人々にはそこは幸福の世界に思えた

人々にはそこは悪の住めない

神せいな場所に見えた

それほど美しく見えた

それほど清く見えた

今日そわらの星は科学的に分析された

またそこへ行かなくとも

それでも神秘さは変わらな

星が私を呼んでくる

星はすくなく見えてくる



森永 忠夫

第五の春

四年前の春

中学校の門をくぐった

第一の春

喜びと興味

第二の春

サンドイッチの中味

第三の春

ああ、いよいよ最後か

第四の春

昇教育隊の門をくぐった

喜びと希望と不安

それはわれわれの第二の人生のスタート

第五の春

皆、心の中心はつかせ

未来に向かって進むフアイトがある

もうひとつはただ頑張れ



徳島 一安



到来

夏が来た

夏の太陽は梅雨を追っ払った

夏の太陽は赤銅の膚をくれた

秋が来た

秋の青空は赤銅を溶かした

秋の青空は躍動をくれた

冬が来た

冬の雪は躍動をうすめた

冬の雪は赤いしもやけをくれた

春が来た

春の野原はしもやけを包んだ

春の野原は愛をくれた

夏

秋

冬

春



2班 小林 賢一



3班 太田 逸男



「あの人は」
何を考えているのだろう
あの人は
松の木に腰をおろし、空をながめている
遠くを歩いたの事を思い出しているのだろうか
それとも、父、母の顔を思い出しているのだろうか

あの人は、じつと空をながめている

何も考えず、ただなんとなく空をながめているのだろうか

それとも、今日の反省をしているのだろうか

僕には、わからない

僕にわかるのは、あの人が空をながめているということだけだ

あの人は

いったい何を考えているのだろう

「消灯後」



水測 岡村 良三

巡検も終わりのみちやへー日がけつじつじつ気持ちはなる

「あめくたびれた。今日は延灯やめようかと思つた。

延灯までなげなく過す

「消灯、消灯」の言をきいても、灯は消える

横になつて窓越しに外を見る

「広いなあ、ケレンス」は

「星がきれいだなあ」

「水銀灯がまぶし」

別に何もきえていない

ただ、さう思ひ浮かんだだけだ

「こんな空の時間、僕は好きだ」



孤独

孤独！

氷のように冷たくするほどに人は
人間には孤独になる時が必要だ
この時を持たない人は
汚れだらけのくさくさ
この時自分を顧みた人は
いつまでも正しい道が広がっていく
孤独！
人間には必要な時間



渡辺 真一



雨

今日の雨は冷たく無情に降っている
カップを忘れ
なにもかぶる物のない俺にとって
雨の冷たさは
氷のようにはだにしみ込んでくる
スポンはびしょぬれだ
この雨がしゃべりだ
雨よ、俺たちの身にもなってみろ！



3班 樋口 満生



自然

バラがさいた
何もふしぎなことではない
バラの木にはバラの花がさき
しずかにほほえみかける
バラがちつた
人はそれをふみつける
ほほえみかけていたきれいなバラを
人が死んだ
人々は泣きわめく
人々は死んだ人にバラをささげる
バラは天国へ人をみちびく
バラがさいた
善人にも悪人にもほほえんで



水測 石原 恒夫



勇気

遠くから吹いてくる風に

今日の風はさわやか

自分から吹いてくる風に悲しみを伝える

冷たい風は悲しみを伝える

暖かい風は喜びを伝える

冷たい風はかたじけなく怒りを伝える

その一面は真白な紙に

それを真黒い墨が汚す

いや私の現在ほど強く強く扉を叩かれたら

その心の汚れも

ただ、……

でも私はそれをほなほな

勇気が



水測 森尾 邦雄

「夢」

私は夢を見た

彼女の夢だ

「好きよ」

彼女は言った

「好きだよ」

僕も言った

セーラー服が美しい

僕もセーラー服

又、美し

彼女は下を向く

僕も又下を向く

突然

彼女は僕に寄りかかった

僕は強くなった

瞬間

妙な音がした

夢は終わった

マクラが破けていた



新名 吉富

「試験」

おれは金なにをしているんだろう

そつだ 試験を返しているんだ

なんていやらしい問題だ

いったいだれだこんなんもつったのは

昨夜、必死でおぼえたのは、こんなんじゃないぞ

時計ばかり気になる

解けるやつからやつていこう

やつぱりだめだ

エエー もつていってでもいっや

おれはどうしたらいいんだ

国泰寺が、オしを呼んでいる



水測 重松 均

初夏

自然は青を呼び

人間は白を呼んだ

自然は若葉を呼び

人間はこいのぼりを呼んだ

自然はそよ風を呼び

人間はすだれを呼んだ

自然はしよぶを呼び

人間は白い制服を呼んだ

自然はスカツとするアイスクリームを呼んだ

自然と人間がいきりまじって初夏を呼び

自然と人間があつて今年も初夏がやって来た

自然が青を呼び

人間が白を呼んだ



水測 渡部 修司

「人生詩」

男女七才にして席を同じゅうせず

我九才にして、初恋を感じる

十二にして、恋に破れる

十五にして、志をたてる

「かあちゃん、俺、自衛隊に入りてえ！」

十六にして、井の中を知る

「生徒は楽しいね」

二十にして、大海を知る

「世の中、きびこさ」

二十五にして、妻をめとる

「じりや、しめわせだね」

三十にして、立上

「部内幹候はきつかった」

四十にして、惑わず

「スエナム仲裁、見事なもの」

五十にして、世をはかなむ

「定年とはなほなほなぞ」

六十にして、わが人生を悟る

「人生なんて、こんなものぞ」



水測 脇本 由一



総員起し

〇六〇〇しんとした校内に

ラッパがなりひびく

ハッと目がとめる

まだねむい

外は寒い

起きなければならぬ

ベントからとび起きよ

一瞬にして毛布をたたまなければならぬ

全速力でグラブントへ出る

一日の活動の始まりだ

海からの寒風を受け取る

寒さが身にじみる

ふと父母の事を思い出す

寒さにまけてはごうわなご

今日も一日がとほひなへてはなむらなご

たぬぬ、おは、おは、おは、おは、おは

そして甲板掃除に取りかかるのであった



3班 柳瀬 泰雄



カッター

「ジャージャー」

汗が流れる。手がいたい

敵とせり合っ

「ジャージャー」

オールが重い オールにおどろかされる

敵を抜いた

ギョギョギョ

「ジャージャー」

水がのみたい しりがいたい

敵もつかれた

もう少した

決勝線通過

終わった

「一時間みんごとだものだ

熱いものが胸をさしみていへる



2班 庄野 健郎



運命

私は通信教育性

勉強……

そっだ、しなげればならん

気がむかない

今日明日あつて

私の目は本をす通りして、本の中にはいつてゆかない

友達からの便り

ふたたび考える

勉強……

久しぶりに今日は本と取り組もう

無理にでも

「しつて楽こへんて、勉強を続けよう

私達は通信教育生だから



2班 福本 耕作



おわり

生

おのれの英知と権力を

その姿いっばいに誇示する太陽

ある時は怒り狂い

数知れぬ人や動物をいついそいつに消滅してしまふ

またある時は思いやりに手をのびて

それら生物を温かい胸にいだいてくれる

きまぐれな女神

彼女は、

幾千幾億もの息子を育てた

彼女は、

永遠に不滅だ

しかし

息子達に与えたものは

破滅への快樂とつかみどころのない労力と

死ではなかったか

それでも息子は、偉大なる母を求めつつ

生命をもやしこしく死んでいく

息子は母に

何を求め、何を導るのか

ああ

父たる大地よ

我に道を与えん

我に勇気を与えん

我に希望を与えん



水測 武田 繁典



「幸福とは」



2班 片桐 悦夫

僕はいるから二人の親友を持っています。ぶるるといって生
まれた土地ではなく以前住んでいた所です。

一人目は典型的な勉強家で、常に参考書を体から離さず中学時代
は「本の虫」が「シムリア」が呼ばれていました。正式なあだ名は「サ
ル」なのですが…。趣味はラジオの組立てで、勉強をしない時は学
校の帰りに部品を買って来て組立てていました。しかし僕が遊びに
行くたびに手を休めて歓迎してくれます。つまりただの勉強家で
はなごうさんなのです。普通の者ならば自分のじやまをわけるわけ
ですから顔をしかめたりして邪魔者扱いを受けるんじゃないかな
らう。自分を常に「見失」にならざるを得ないのは難いことが社会の一
つとして必要なのです。

あとの二人は兄弟のチウなものですが合っています。時々紛争
については契約を締結してその仲を深めています。この二人を見てい
ると何となく明るく気持がよくなってしまふ。彼ら二人の家には「二
三回宿まりがけで遊びに行つた」ことがある。お互い遠慮はしない。
まぢうな家族は別であるが。気軽に何でも二人で話し合つた。僕が

困っている時は本当に僕の身になって考えてくれた。僕は冗談が
好きで寝床で三人いつも言いあつた。彼らは本当の冗談を知ってい
る。やせやせする。冗談と皮肉は一語にやわがやわがあるが、決して混
同をしない。冗談はぶざけつて言う話でその場限りである。しかし皮
肉は遠回りに相手の弱点などをいふので、ゆがみ合ひの原因とな
る。やせやせはならない。非常に微妙であるが決してまぢうがえりはな
らない。

又聞く側として冗談と皮肉のつかない者は哀れである。それに
つて友達の関係がくすむからいふのである。その点彼ら二人は心得たも
のでオーバーな表現をしてもそのボーダーラインを越えはしない。
そして疲れはてる。つつか眠つてしまふのである。

そして四人揃つた時が又楽しい。例のサルもサルらつて振舞いを
するのである。

この三人に囲まれている時僕は幸福とはこれだと思ふ。

頭の上の出来事



3班 森本 裕輔

今日は口躍だ。空は晴わたり、小鳥は春を告げずしてさえずる。美に気が持たがよい。四月から伸ばし始めた髪も、そろそろ恰好がつけきそうになっている。友達の金を借りて、散髪に行ってもいい。

床屋の縁に包まれた窓から、ハサミとバリカンの快い響きが、その風に乗じてさる。

中では同じ心をもった者が、自分の番が来るのを、心密かに待っている。頭を伸ばすのが恥まかし、そのうしろした者と目が合わないよう、下を向いたり、窓の方を見たくもないのを見ている。そうしているうちに、心待ちしていた声がかかぬ。

今日はいよいよ、神妙に椅子に下座。

ただ、自分の顔を自覚してさるの、そのあとの、格好なハサミはかたが頭の上がバリカンが走り出すと、どんな顔になるかという不安と、人前で、自分の顔をよもよもそうに見せることの恥ずかしさ、一諸下なり、またその鏡が見らわす、しじむらしてさる。

人の目を盗んだでは、鏡に映った未完成の頭を見て喜ぶ。鏡の前で舌面相をし、気に入った顔が見つかる、その顔をじつと見て自己満足

する。マツ、おじさんが又戻って来た。緊急事態だ。今までの、心の底から出ている笑いと、神妙さが妙に入り混ざった顔を、無理矢理、にがみつけた顔にする。生徒の質を落としてはいけないと思いつた、うだが、またその質を上げてさるの顔だ。またそのうしろしたてはじまらなう。

その顔も、シヤキンシヤキンという、快いハサミの音に出会う、たまの元のえびす顔になっている。

でも心配なことがある。その内面的に充実してさる、劣等感を持っていると、なんとか自分を人から認めてもらおう。人目を引きたう思いついて、表面的に着飾り、いわゆる恰好いい服装をして、内面の不十分なうしろを隠さうとする。そして虚栄を張ったり、人目を引く行動をする。今の自分もそうではないだろうか、自分の幼稚なところを、頭を伸ばして少しでも大人に見せようとする。それに彼女の目を、少しも強へんうしろとさるの、うしろがいない。

それでも髪を伸ばすのは美に気持さがい。第一顔が少しは見られるうしろになる。それに自由が、頭の上入やう来たような感じだ。百〇〇円を払い、もう一度鏡を見なおす。そうだ、外面的な自分に負けない、内面的な自分を充実させ、本当の意味で、大人に近づかなうてはう。

古い鏡にただ戸を開ける。外の景色がまるごと違っている。

そうだ、頭の上にも春が来たのだ。

— 空想物語 —



水淵 黒 誠

西暦二〇〇〇年、私達が自衛隊にはいってから、早二十五年にもなる。入隊した時二等海士であったが今は、二等海佐まで進級した。今私は護衛艦おおしき「あつちゅう」二万六千トンのぶねの艦長をしている。最高速度五十ノット、長二百五十メートル、幅二十メートルで、日本で最も新しい艦である。無人入りのコックピット機、原子力を利用してロケット装置「基など」、世界中で最も新しい武器ばかりつとめてる。日本の国防の国の中での武器の中での。飛ぶ。それは、太陽光線利用したムラサミミラールという武器である。飛行機に対しては百発百中である。それが完全下でできあがれば武器としてばかりでなく、鉱工業にも、おおお役に役立つであろう。私が江田島で勉強して参りました。「あまつかげ」たかつき「じな」艦も今はみなな魔艦「なまじり」になりました。……

話は変わって、先日おつちと休暇をとって家族そろって、月旅行に行ってきた。家族とは、子供二人に妻が三人である。一九八〇年ごろから、きゆうに女がふえはじめ、夫一人に妻三人というのがあたり

まえのようになった。私の妻は二人とも美人で、あまり美男子でない私には、不思議なくらいである。

古鷹宇宙センターから月の風の海までは、わずか十時間である。子供と何か話してあるうちに、眠っていた。目がさめてまもなく、月に到着した。おつちと宇宙服をきて宇宙船をよび出した。からだがふわふわしていて、非常に気持ち良かった。地球上で二二トンの石でも「」では重力がないために軽々と持ちあげることができた。それから、月の裏側もいろいろ見てきた。火山のあととみられる火口がたくさんあった。わずか二日だけだったが、非常に楽しかった。今度いつか江田内に入った月の石を、参考館に送りたいと思ってる。

「おおまかじ」は「ロ」きゆうも祖国防衛のために「あつちゅう」は太平洋の荒波にぶつかって「へ」。



自衛隊という組織は、国の方で、いろいろな援助、宣伝しても、国民が全然関心を持たず、協力しないならば、次第にその力は弱まり国防などという大任は果たせないのでしょう。

国及び国民が一致協力してこそ、自衛隊のほんとうの力が発揮できるのではないのでしょうか。しかし、国、国民がいかに支援しても、当の自衛官が、失敗ばかりして、みそになられたのでは、いかわただめでしょう。年寄りはおんなじことを言われます。自衛官は昔の軍人に比べると骨なしだ。私は昔の軍人が、どんなものであったかしりませんが、現在の自衛官がそうだとは思っていません。が今の高年層の人の目には、そんなたよりない者ということだけで映っているのではないかと。私の点、我々はもうと考えるべきじゃないでしょうか。国民に対していろいろな希望する前に、自分をどうにかえり、昔の軍人に優るとも劣らぬりっぱな自衛官になるよう努力する必要があると思います。我々がもう一つかりこいて、国民に信頼、期待されるようになったら自然、自衛隊の存在も高まり大切になるでしょう。

私は、そこをなかなかなかなか言はせませんが、そこを努力する努力をしようと思います。



休暇



3班 和田 昌三

私達には、年3回のきゆうかがある。私は、これまで、4回の行事を経験した。

しかし、その後に残るものは、言い様のないおびしきであり、現在の生活への失望であった。毎回の休暇の後に数名の退職者がいる。自分でも、現在の生活から解放されたいような気持ちを、持っていると思う。それを、休暇で、発散させてしまい、後のけじめがつかないため、それが休暇後のさびしきとなり、現われてくるのではないだろうか。何か月ぶりかで故郷に帰れば、両親の顔も見れなくなり、大事なことをくわえる。友達に会えば、高校生活の楽しさ、苦しさを、就職したものは、職場の楽しさ、生活の苦しさを話してへくれる。しかし私には、そのおびかもが、素晴らしい思い出がある。おもしろい。親も友達も、私を慰まわっている。思い出はたくさんある。今、今の生活に満足していても、自然に、おもしろい。その満足感も、自分で言い聞かせたおもしろい。自然に、おもしろい。満足感でないのだ。そんな事が、おもしろい。失望となっていて、現れてきているおもしろい。この休暇後にも、同じく、おもしろい。自分が腹ただしおもしろい。休暇が終わるおもしろい。

すべの次の休暇まで何日か、数える人がいるが、その人を見ていると自分と同じ気持ちでいる細い細い人ばかりだ。休暇は自分だけの一種の目標だったけれど、そればかりがなくなってしまう。4年間の生徒生活を終わらせたときその目標を失ってしまうような不安な気持ちになる。でも、それは、両親の気持ちと初年層の言葉だ。

帰省



水測 岡本 正治

入隊して初めての帰省は一年前の、確か四月二十八日の夕方からだったと思う。その時は非常にうれしかった。ちやうどあの住み慣れた山や田んぼや川などを見たくなった時だったせいもあるだろう。かなにより、久しぶりに友達に会えるのが楽しかった。

私は広島からバスで帰るのだが、そのバスが目的地に近づくにつれていろいろな事が頭に浮かんで、何となく楽しくなっていく。バスの中で一人で顔をほころばせていたのを覚えてる。



しかし、休暇の度が重なるにつれて、私は何となく、親への感謝の気持ちが薄れてくる。家に帰る時や、田んぼや川を見ながら、自分も楽しんでいる。でも、それは、両親の気持ちと初年層の言葉だ。両親はまた帰ってきたのだか、帰ってきたら、両親の気持ちと初年層の言葉だ。両親はまた帰ってきたのだか、帰ってきたら、両親の気持ちと初年層の言葉だ。両親はまた帰ってきたのだか、帰ってきたら、両親の気持ちと初年層の言葉だ。

「僕が思いついた」



2班 梅澤 徹

郷里から遠く離れて生活してこゝろ、休暇で家へ帰ると「一番楽

こころ」の生活に慣れるにしたいが、勉強の方がおもしろい

な。勉強は、思ひ出の思い出が、思い出が思い出が思い出が思い出

が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が

だんだん「」の生活に慣れるにしたいが、勉強の方がおもしろい

なってきたか、そんなとき、休暇で友達に会ったときのことを書き

て、また心から思ひ出す思い出が思い出が思い出が思い出が

郷里にはいろいろな思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

な。勉強は、思ひ出の思い出が、思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が

思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が思い出が



時々考える事



水測 永野 善広

時々私は考える。自分の能力について。そんな時、私は自分がいやになる。

どこか遠くで一人で暮らしてみたい。などと空想し考える。頭の良
い人はこんな事を考えるだろうか。おそらく考えるはしないだろう。
そして劣等感も少ないだろう。ただ自分の目標を、決めて真直ぐ進
むことができるだろう。「わが今の世の中だ。新聞や雑誌でよく青
少年が無謀な事をして警察に補導された事件が言われている。青
少年の意思が弱かった。」と言えはそれまでだろう。しかし年々増加
しているのは何故だろうか。世の中が複雑になり能力または経済的に
差が大きくなってきているのではないだろうか。また現代の人間関係は
昔に比べ冷たくなっている。などという文を読んだことがある。私も
同感する点がある。我々凡人はいつでも劣等感を持っている。「のま
まで行へ」と誰かが無謀なことを行おうとするものではないか。特に
若い人々は、自分の能力を信じている者は無駄なことはしないだろ
う。自分が少しでも劣等感を持つと、少しは嫌いだ。少しは嫌いだ。

対して冷たくされれば、もう少し社会的に考えなければいけないの
ではないか。なぐと考えるが、それから先はまだ考えられない。考
えてもわからない。
ともあれ人間として生まれてきたからには、能力のない考えであ
っても何か価値があると思う。



総員起しの時

水測 村中 良

術校の生活で一番いやなのは、毎日の総員起しである。あの
たたまたしリンパの音、あわをきかんだだけで、せよ、せよ、せよ。
また今日一日きついなあというも思う。自衛隊に入ってもう一年以
上たつのに、いまだにリンパはいやだ。しかし一度起きて、その
じを、まは、一週、リンパ、リンパ、リンパ、リンパ、リンパ、リンパ、
わすれて、気持ちがいい。明日になれば、また総員起しのリンパ
に、気を悪くして起すわ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、わ、
送る。姿な毎口だ。

俳句



はだしみるしおかせむわへ
 春夏秋冬にいきなりこのひ
 むねうしほいだ……

菜の花にとまのちましのあせやかな
 たんぽぽやあせみちをける一輪の花
 春の日にひびり飛び交う麦畑

波高く白波立ちしはしんじつ
 右見れば石欄海ついで緑のけり
 なるたけの思ひをいそめてたまたまひひす
 なるたけの母、弟、親、こゝろ

昔々にたんぽぽとついで花開く
 雪のころなるたけの夜の春の雨
 地を割りし馬鈴薯の芽が緑の芽
 夕焼けや家を遠くついで空を見



水測 小西 一之



水測 伊藤 修



水測 法土 猶典



水測 清野 勉



御飯時家では何をすることがぞ
 江田内に入りし軍艦はイギリスの軍艦
 試験前あわてふためくそのすがた
 そら来たぞラッパの音だ総員起こし
 ふかぶかと眠りに入る五時限目

残雪に春日が当たり溶け行けり
 そびえ立つ槍や穂高も緑なす
 頂上に雪をいだく笠ヶ岳
 野や山が緑色つく春五月

雪解けの水を集めて谷川へ
 開け行く高原の春緑色つく
 ほかほかと当たる春日に霞立つ
 水ぬるみ川にはねるは魚かな
 そよそよと春風そよよの丘上
 点々と十手に咲くのはしんじつ

江田内のそよ風ふきて春うきさ
 かすみだて江田内へらぬ雨上がり
 海面しすほらしてき春の朝



水測 横山 孝行



水測 金田 佳幸



水測 中丸 治行

川柳



給料日金につばきがついたのか
晴、雨、雲ラジオ聞くよりゲタを投げ



2班 北山 至



水測 高橋 長生

教養は 高き古鷹 実は清き

江田内のような 生徒隊

がんだんの ちかいわすれて いねむりす

読み人知らず

踏みしめる 胸の重さを ぶと 思う

故郷の母 1105のト

風根に寝て 星を眺めつ 故郷を

思いつかへた 過ぎしあの夏

夕暮れた 江田内わたる 春の風

きみ明え田も 明日のロケット

秋空に 白き尾を引く 糸雲の

指す所 父母の住む

短歌

故郷の海に向かいて 荒海に

我いどまんと たたすむにけり



2班 濱野 義信

うすくびら 星も見てくる 朝駈の

吐く息口を 試練の道や



2班 川尻 和正

闇の中 夜汽車の灯り 尾をひいて

故郷の母の顔 思いついて



水測 立川 正秀

青葉から 静けさをぶりなく 蟬の

声に 幼き日の 思いついた

トンボ追う 幼児の姿に ありつ日の

友を見つ出して ながかしまん

小夜ふけて ゆわし水面に 照り映ゆる

満月の天 キンギョと

漢詩

絶望

試験破山河在 答案悩深
感時我疑頭 恨別親疑頭



水測 中條 慶晴

夕ばえにかすみたなびく江田内は
今日も静かにくれゆくかな



水測 内池 寛

静かなる夕やみせまる砂浜に
何を思うか友はたたずむ



水測 森下 温樹

今日もまた同胞死せりベトナムの
たたかい重く心にびびる

静寂な 野山をめぐる 我一人
緑がつつむ 初夏の候

黒い水面



3班 矢野 大介

あの事件が有ったのも今夜の雨のシトシト降る夜だった。
丁度二年前、昭和四十年五月二十八日、あの日のことは私にとって
は一生忘れることができないだろう。恐ろしい、考えるだけでもこ
じとする。あの事が有ったからといって私の私は雨降りの日はイヤ
だ。恐ろしいのだ。

「この事は、あまあり人に話すべき事でない」と、今日まで両親の外、
誰にも話していません。しかし、月旅行も不可能でないと思え
られるようになった現在、科学では解けない不思議な事がいくつでも
も有るといふ事を皆さんに知ってもらいたいです。雑誌などでよく
知られていますが、実験体験をされた方は少ないと思います。そ
れで二年間、私の胸の中には思っていた奇怪な話を皆さんにお話
しまして、まだこの地球上には不思議なことがいくつでも自分の
廻りにはあるのだと信じていることを知ってもらいたいです。

昭和四十年五月二十八日。この日は土曜日です。二三日前からの
雨は、その日もシトシトと降り続いていました。私は学校の帰りに、友人
の家へ、レコードを聞きに行き、つい時間のたつのも忘れてしま
いが付いた時、時計は既に六時を過ぎていました。天気の良い日の
六時過ぎと云えば未だ明るいのですが、雨のため外は既に、薄暗か
った。友人の家から私迄四キロ位あります。でも田舎道なので、自転

車でも十分近くかかります。友人の家を出たのが、もう半に近かったです。友人の家と私の家との丁度中間あたりに、総光寺と云う大きなお寺があります。そのあたりには、部落と部落との別れ目に位置するのでお寺の外に軒農家があるだけで、とても淋しい所です。お寺の裏手に「おのろ治」と呼ばれている小さな池が有りまして。丁度、私がそこを自転車を通りかかった時、池の縁に女の人がじつじつ立っているのが分かりました。雨は小降りでしたが、傘もなくて立っ立っているなんておかしい。と云うには私は、「身投げ」と感じました。少し気味悪かったけど、好奇心にかられるままに、自転車を止め女の人に近づいて行つた。見ると子供を抱いている。「どうかしましたか？」と尋ねると、少しも驚かす振り返つて、「いえ、ただこの池には悲しい思い出があるのです……」その顔のきれいな事、すごい美人でした。薄暗かったのですが、なぜかはつきり見えませんでした。聞いてみると、総光寺に来ている親戚の方だと云うことが分かりました。赤ちゃんも雨が降っているにもかかわらず、声もたてず「……」笑っていました。女の人は何だか、どことなく悲しそうでした。「身投げ」なんて、気を廻しすぎたなと思いつながら自転車の所迄行き、「おのろ治」なびびびと云うおのろ治と振り返つて見て驚きました。顔から氷水をかけられたように一瞬硬直しました。もう少しで倒れそうになりました。たつた今そこにいた女の人がいらないのです……いないのです。

まわりには身を隠す場所はないし、水に飛び込んだ音もしなかつたし……私は恐ろしいおのろ治のめまろ自転車に飛び乗り一目散に逃げ帰

りました。気のせいかな、おのろ治の赤ちゃんの声が背後で、あわわに聞こえるのです。真青になって、家に帰り父母に、その事を話すと、「……人共、顔を見合わせ、やつぱり……」と云うおのろ治な顔をして、次のような事を説明してくれました。

それによると、今から九年前、すなわち事件の日から七年前、やはり五月の下旬に総光寺の次男で神戸に住んでいた息子さんが、子供が生まれたので、両親に見せようとして、はるばる神戸から親子三人で田舎のお寺へ帰ってきたそうです。連日雨のため、川の水も大分増水していたのにもかかわらず、息子さんは、魚釣りに行き、連日知知をすべらせ、おのろ治の味も弱れてしまい、死体も上がらなかつたそうです。花嫁さんは、あまりのショックに気も狂わんばかりになり、翌日裏の「おのろ治」に生まれたばかりの赤ちゃんを抱いたまま身を投げたそうです。

父からこの話を聞いているうち、私はガクガク震えだし、母の顔がさっきの女の人に見えたりして、食事する気にもなれず、その夜は父母と同じ部屋に寝ました。

七年たつた今でも霊魂が浮かばれず現れるなんて、恐ろしいと云うより、その女の人が哀れでなりません。でもあの時振り返つた時の恐怖と云うものは一生忘れられないです。この事など、科学的には考えられないのです。世の中にはおのろ治のような事がいくらでも有るのです。

月旅行も結構ですが、その前に自分達の廻りりの霊魂の世界を研究してみるのも興味ある事ではないでしょうか。



おわり

チルビの一日



水測 松田 真治

私はみみずです。今、チルビという訳か私より何十倍も大きな魚の胃の中です。あたり一面は真暗けのけ。えー！なぜそんな所にいるのか。チルビ、チルビ、私の言っているのを聞いて下さい。実は、チルビという訳なんです。

一九六七年の夏の暑い日、私はある川で釣場の一角に宿なしで住んでいました。数人の友達じゃなかった、数匹の友達も一緒だったけどな。ある日、いたずら坊主がやってきました。私達を「こども」もなく連れて行っちゃったのです。人間の世界じゃ「チルビ」の誘拐、チルビのなまこや、チルビだか知りませんがな。しかもあれ、連れて行かれたのです。気がつくやうに水辺にチルビの姿はありませんか。驚へのもつかの間、上からチルビのはひびくような音が聞こえます。め、め、め、チルビズと動いて、私をつかまえようとしていると、はありませんか。冗談じゃない。「難去して又難、私は逃げました。この人間のチルビ的な追跡を逃れ、今日をそして明日をじやないけれど必死に逃げました。しかし力つきた私を二本の指でつかみ、今度は釣針にはさようとしてくれていますか。助けて。私は叫びました。でも誰も来てくれません。『ああ痛い』と思った瞬間、針は私の胸をつき刺して、腹を貫通しました。痛みを知らずえ必死にもがきましたが傷は深まる

一方です。まもなく水の中へトボン。プクプクプク俺はカナツチなんだ泳げないんだ。！私は失神してしまいました。

それから何分かたつたのであろう。気がつくやうに目の前に大きな魚が口をパクパクさせて目の前にいます。今にも私に食いつきそうなお顔を「うまそうだ」と思いながらよだれをたらしています。私はコクリと生ツバを飲み込み、助けて」といわんばかりに相手が気を変えて立ち去ってくれることを祈らなければなりません。それまでの間、パクリと飲み込んでしまっています。そのおかげで針から解放されました。でも「チルビ」のなまこでいい。耳をすすめよう。目の前で水の音がします。『いや水じゃない。』これは酸だ。とすべり、チルビ胃袋なんだ」と思わす。チルビ叫びました。俺はなんて運の悪い奴なんだ。俺は死にたくない。こにだ、くはないんだ。あ、あ……。」



編集後記

編集長 木原

十一の二 岡田 栄

“文学は心の糧、生きる喜び”という言葉がある。我々も早くその様な文集を作りたいと思っているが、あもりにも少ない。十一期の原稿よ。

十二の一 田黒 誠

第二回の叢集が発行されたが、一回に比べ原稿も多かったの編集係としては大変な収穫でうれしかった。やはり基盤となるのは多くの原稿であるから思い切って提出してもらいたい。

十二の三 上林山 貞俊

今度の作品募集ではいい作品が多かったと思います。いろいろな集をつうじて、自分の意見を述べたり、又自分の文章力をためすといのは非常にいいことだと思います。今後、どんどん創作詩、作文に力を入れてもらいたいと思います。

編集記

受け取った文集をそのまま転記しました。例えば「近づく」を「近づく」と云うような場合もそのままです。明らかに編集ミスかもしれない？と思われる部分は判読・変換し記載しました。

とは言え、何分、転記、編纂、校正等は一人で行いましたので、明らかにこれはおかしいだろうという箇所を発見した方は遠慮なくご連絡下さい。

自啓会の存在すら記憶が曖昧で、このような文集を作っていたとは、全く知りませんでした。私の投稿文が一つも無いと云うことは、全く無関心であったと今頃深く反省しております。それとも、投稿文章が余りにも幼稚でボツになったとも考えられますが(笑)

そんな私がこのような編纂をしているのですから不思議でなりません。人生って分かりませんね。

どうぞ懐かしい記憶を思い起こし、「ああ俺はこんなこと考えていたのか」などと回想し、そしてそれが老春の活力の一助になれば幸甚です。

3班 織作 峰生

我々の文集「永遠」が装いも新たに「銀桜」と名を変えて、第二回の発行を見るに至った。半年ぶりの発行である。当初の予定では四月上旬頃発行ということだったが、とてもそうはいかない。わたしの至らなさを改めて思いしらされた。が、しかしそれにも増して文集発行が遅れた原因は原稿の集まりが悪いということだろう。また、わたしの文集に対する熱意が足りない。残念だ。わたしは「の言を限りに編集の仕事から降りるが、後に続く後輩諸君は、わたへの様にスポラをしないで「生徒自身の手で作る文集だ」ということを充分認識し、素晴らしい文集にすべく努力をしていってほしいと思う。

後輩諸君頑張れ！